

(2) 阜平県教育と体育局は阜平県職業技術教育センターの音楽器材購入プロジェクトの総括報告について

2025年12月、阜平県職業技術教育センターは音楽器材の購入作業を開始し、トランペット、琵琶、バイオリンなどの音楽器材29点を購入し、52,920元の資金を費やした。現在、我が局は阜平県職業技術教育センターが寄付金で購入した音楽器材の運行状況と収支状況を報告し、以下のようにまとめた。

一、プロジェクトの背景

阜平県職業技術教育センターの音楽教育の発展をさらに推進し、農村振興に助力するため、2025年12月、阜平県職業技術教育センターの申請を経て、わが局は貴会と援助協定を締結し、貴会は45,000元の資金を寄付し、すべてトランペット、琵琶などの音楽器材の購入に使用した。

二、プロジェクトの状況

我が局の監督管理の下で、阜平県職業技術教育センターは政府の仕入れ規定に厳格に従って、三者の引き合いを実施して、市場に3軒の優良品質の音楽器材の供給商を選んで引き合いを行って、河北九日文化発展有限公司のオファーは52,920元、高碑店市文明街奇音琴行のオファーは56,430元、高碑店市迎賓路星之海楽器行のオファーは53,550元です。学務会の研究会議を経て、最適な供給商を確定し、河北九日文化発展有限公司の音楽器材を購入した。

2025年12月20日、阜平県職業技術教育センターは河北九日文化発展有限公司と音楽器材の購入契約を締結し、2025年12月30日に音楽器材がすべて入荷し、学校の購入検収グループ（購入責任者、購入主管部門責任者、学校主管校長）の検収確認を経て、数量が一緻し、品質が合格した。協議の規定に従って、購入資金の支払いが完了しました。

三、プロジェクトの効果

今回の音楽器材の購入プロジェクトの実施を通じて、阜平県職業技術教育センターの音楽教育レベルは著しく向上した。新たに購入したバイオリン、琵琶などの器材は、学校の音楽教育資源を豊かにしただけでなく、学生により広い学習プラットフォームを提供した。今回阜平県職業技術教育センターが購入した楽器は29点で、2023年に購入した楽器と合併し、民楽団1チーム16人、鼓号隊1チーム65人、合唱団1チーム60人、木管楽団1チーム14人を結成した。弦楽四重奏団は1チーム4人で、学生の音楽素養と総合的な素質の向上を効果的に促進した。同時に、これは学校の特色ある教育の発展に新たな活力を注ぎ込み、学校の教育の質と影響力をさらに高めた。

また、このプロジェクトは、地元の音楽教育レベルを向上させ、専門的なスキルと良好な音楽素養を備えた人材を育成するために、強力なサポートを提供しています。同時に、これは社会各界が阜平県教育事業に対する関心と支持を表し、現地の教育事業の持続的で健全な発展を推進するのに役立つ。

四、費用の状況

サプライヤーの提供価格によると、29件の音楽機材の価格は52,920元です。我が局の指導者の協議を経て、貴会と締結した援助協議によって、援助資金の総額は45,000元で、貴会はすでに45,000元を支払って、残りの7,920元は阜平県教体局がセットにして支払います。

以上は阜平県職業技術教育センターが購入した音楽器材の運行状況と収支状況である。
ここに報告しますので、貴会の審議をお願いします。

添付資料：1. 阜平県職業技術教育センター楽器購入契約及び領収書
2. 阜平県職業技術教育センターの楽器使用状況資料

阜平県教育とスポーツ局
2026年1月22日

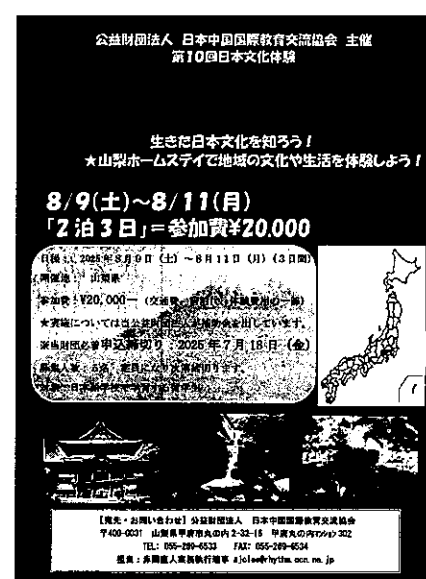
(3) 阜平県教育と体育局阜平県職業技術教育センターの音楽器材購入プロジェクト決算報告について

阜平县教育体育局による阜平县職業技術教育センターの音楽器材購入に関するプロジェクト決算報告

支出の項目	明細勘定					決算の金額
阜平県職業技術教育センターの音楽器材購入プロジェクト	トランペット、琵琶などの器材29点を新たに購入し、学校の音楽教育資源を充実させ、学生により広い学習プラットフォームを提供し、2024年に楽器を購入することと合併し、民楽団1本16人、鼓号隊1本65人、合唱団1本60人、木管楽団1本14人を結成し、学生の音楽素養と総合素質の向上を効果的に促進した。具体的には以下の通りです：					52,920元（うち7,920元は阜平県教体局がセットにした）
	シーケンス番	名称と仕様	数量	単価	金額の合計	
	1	トランペット	2	2,700	5,400	
	2	アルト・トロンボーン	2	3,250	6,500	
	3	ホルン	1	5,200	5,200	
	4	ヴァイオリン	3	1,780	5,340	
	5	チェロ	1	4,200	4,200	
	6	箏	1	4,280	4,280	
	7	ハーモニカ	1	4,800	4,800	
	8	二胡	4	1,650	6,600	
	9	琵琶	2	2,600	5,200	
	10	アフリカンドラム	12	450	5,400	

第10回教育交流ホームステイ in 山梨 (教育交流 研究等助成事業)

外国人留学生は、年々増加しています。特に多いのは、中国からの留学生です。彼らは日本での生活の間に、より多くのことを経験し、また学ぼうと意欲に燃えています。そうした留学生に関わって、日中の教育交流及び文化交流そして強い相互信頼による結びつきを目指す協会の願いとしては、「日本を理解し、日本と母国との友好を担ってくれる人材により多く育って欲しい」と、言うことがあると思います。日本に留学している学生のほとんどは、日本語学校に通学していますが、特に入学初年度は語学力も十分でない上に、なれない異文化の中で、学業・日常の生活面で困難に直面している学生も多いと言われています。協会では、こうした留学生の語学力の向上をめざし、日本をより良く理解する人材を育成するために、教育交流・研究等助成事業としてホームステイ事業を実施しています。コロナ禍の影響により、2019年度の「第8回教育交流ホームステイin神奈川」の実施から、昨年度の再開までに5年も経過してしまいました。この取り組みは、協会の事業として大いに意義があるという評価をいただいていたので、今年度「第10回教育交流ホームステイin山梨」として実施できたことは、大きな喜びです。



(1) 第10回教育交流ホームステイ実施要項

- 実施目的** 中国人留学生の日本語学習の一助として、日本家庭でのホームステイを体験し、ホストとの交流を通して日本語の語学力を磨き、日本人及び日本文化に対する理解を深め、日中両国の友好の礎を担う人材を育成すること
- 実施期日** 2025 (令和7) 年8月9日 (土) から11日 (月) 2泊3日
- 実施場所** 山梨県下の小中学校教職員の家庭
- 対象者** 中国からの留学生 (大学・大学院入学のための語学研修生)
- 募集数** 5人 (ホストファミリー7家庭)
- 募集方法**
 - 留学生5名については、フジ国際語学院等を通じて公募・選考する。
 - ホストファミリーについては、山梨県の教職員関係団体の協力を得て選定する。
 - 男女比は、ホストファミリーの希望を聞きながら調整する。
- 日程**

8月9日 (土)
新宿駅9:00集合→山梨へ (新宿9:30発JR中央線かいじ11号甲府行き)、JR甲府駅11:14:ホストファミリーと合流 (自己紹介等簡単なセレモニー) →ホストファミリーごとに活動にうつる

8月10日 (日)
ホストファミリーごとの取り組み

8月11日 (月)
午前中はホストファミリーごとに過ごす→山梨県教育会館15:00ホストファミリーとのお別れ会 (全体総括会) →JR甲府駅16:50 (甲府発17:02発JR中央線あずさ44号新宿行き) →新宿駅着18:45解散
- 経費**
 - 留学生から参加費20,000円を徴収し、協会から交通費 (実費) 及び食費5,000円を支給する。ホストファミリーへは、諸費用として30,000円を協会より支給する。
- 取り組み**
 - 7月25日 (金) 12:00～ホームステイ参加希望学生説明会
 - 7月28日 (月) 15:30～ホームステイホストファミリー説明会
 - 各ホストファミリーには、計画書を出してもらう。
 - ホームステイ希望者には、紹介書類等を出してもらう。
- その他**
 - 留学生には、旅行保険を掛ける。(協会で負担)

(2) ホスト・留学生名簿

ホスト名	所 属	留学生名
スギタ 孝輔 杉田 孝輔	増穂小教諭	GUO YICHU 郭 溢鑫
ホサカ シン 保坂 伸	小菅小校長	
マツイ ワタル 松井 ワタル	竜王小校長	WANG TAIYI 王 泰一
ソノヤシシタ 晋太郎 染矢 晋太郎	秋山中教諭	TIAN LINYAN 田 林艳
ホサカ ヒロヒト 保坂 洋仁	勝沼小教諭	RONG YOUJIA 荣 西嘉
トキタ ナオト 時田 直人	若草小教諭	TAN YUE 談 月



(3) ホストファミリーからの報告

〈よかった点など〉

- 日本の良さ、特に山梨の良さ等について体験等を通して感じていただいた。(南アルプス市のフルーツや甲州名物のほうとうなど)
- 事前の情報から、留学生に有意義な時間を過ごしていただこうと、見学場所を選んだ。大学生の子どもがいたので、年代が近く会話も弾み、楽しい時間を過ごすことができた。
- 家族にとって得がたい貴重な経験になりました。こういった事業がもっと広く周知されると良いと思います。
- 特に我が家の子どもたちにとっては初めての経験で、共生社会の担い手をはぐくむという観点からも意義のあることだと感じました。
- 結局「国籍」ではなく「人」を見るということを自分自身や家族も改めて認識できました。「〇〇の人だから」という見方ではなく、「〇〇さんはこうなんだ、それは〜だからなんだ」と本質的な他者理解の基本を身体で感じられたことは何よりよかったと感じています。
- 日本の一家庭での生活を受け入れてもらい、「郷に入っては郷に従う」を実践してもらえたことです。先方からの気遣いや遠慮、敬意をきちんと感じる事ができました。
- ワイナリーや甘草屋敷など普段行かない山梨の名所・史跡を家族でも楽しめました。
- 昨年度に続き受け入れを行い、今年も貴重な経験となりました。今年は3日間とも天候が不安定で、予定を調整しながら山梨の自然や伝統を感じてもらえる行程を考えました。事前の紹介文に「富士山を近くで見たい」とあり、ぜひ実現したいと思い、1日目に吉田方面へ向かいました。残念ながら富士山は見られませんでした。

が、ロープウェーからの河口湖の眺めや、モーターボートでの湖一周を楽しみ、山梨の豊かな自然を味わってもらえたと思います。

2日目は砂金取りや紙漉き体験を行い、その後は書道にも挑戦し、日本の伝統文化に触れることができました。夕方からは自宅でバーベキューや花火をし、準備から片付けまで一緒に行う中で交流を深めることができました。手持ち花火と一緒にする中で、関係を深めることができました。3日目は北杜市のハイジの村を訪れ、雨の中でしたが満開のひまわり畑を楽しむことができ、喜んでもらえました。

3日間を通して緊張もあったと思いますが、娘たちも徐々に打ち解け、山梨の自然や日本の生活について話すことができました。見送りの際にはお互いに名残惜しさを感じ、特急の発車まで手を振り合いました。私たち家族にとっても楽しく充実した3日間となり、たいへんよい機会になりました。

○天気が悪かったので予定通りとはいかなかったが、身延山の長い階段を登り参拝をしたり、西嶋手すき和紙のうちわを作ったり、下部温泉に入ったりと、峡南地区の歴史と文化に触れることができたのは家族ともどもよかった。

○好き嫌いなく何でも食べてくれたので、料理を提供する側としてもうれしかった。アメリカ人の留学生を二度受け入れているが、同じく好き嫌いはほとんどなかった。これは留学生を受け入れる上でかなり重要だと言える。

○山梨へ来る以上、田舎好きの人の方がよい。今回の学生はそのタイプだったので我が家のような過疎地域でも好き好んで滞在してくれた。

○事前にいただいた自己紹介などに関する資料が情報を得る上でありがたかった。

○以前にも感じたことだが、外国の方に日本のことを紹介しようとすると、意外に日本の文化・伝統について知らないということに気付かされる。武田神社や恵林寺、富士山周辺など、留学生と見学する中で、私たち自身も山梨の良さに改めて気がつくことができた。

○「吉田のうどん」や「ほうとう」を昼食で食べた。食べられないものも好き嫌いもなく、「おいしい」と言って喜んで食べてくれた。食事をその都度、写メで撮っており、国は違えど、若者の行動は一緒だと感じた。（私も撮るが・・・）

○夜は温泉に行った。普段はシャワーだそうなので、ゆっくりと湯船に入っているようだった。

○たまたまケーブルテレビで市川三郷の花火大会の様子を見た。そこから、日本の花火大会であげるような大きな花火は、中国では各家庭であげると聞いた。（だから火事が多く禁止になるそうだが）その他にも、中国の文化や食生活、習慣など様々な話を聞くことができ、私たちもこのホームステイを通して勉強することが多かった。

○ホームステイを通して、交流が生まれ、妻は、今もラインでつながっている。

〈学生への評価〉

○日本語がとても上手で、また日本の文化にも理解があり、とても良い雰囲気が作られていた。

○疑問点はスマホを使い、その場で解決するなど、意欲的にコミュニケーションをとっていた。

○日本食の好き嫌いも少なく、ほうとうや手巻き寿司など、堪能していた。

○あまり「～したい」「～へ行きたい」という主張もなく、控えめで遠慮がちでした。ただ、礼儀正しく、「何か手伝うことはありますか」など気配りもでき、礼儀正しく過ごしていました。

○食事中や団らんのときには自分から質問をするなど、興味や関心のある内容については積極的にコミュニケーションを取っていた印象です。会話の中で難しい日本語が出てくると、スマホで調べて意味を確認したり、再質問して言葉のニュアンスを尋ねたりしていました。子どもたちもそれに答えようと説明の仕方を工夫していたので、互いに良い学習になったと思います。

○写真を撮るのが好きなようで、観光先の写真や自宅周辺の自然などを上手に撮っていました。出先で頻繁に写真を撮っているのは国籍関係なく若者らしいと感じましたが、特にマナー等に問題はなかったと思います。

○子どもたちを本当によく可愛がってそれぞれの良いところを見つけ、ほめてくれました。人に関心があるのはとても良いところだと感じています。

○とても真面目で、何事にも前向きに取り組んでいました。初めての山梨の料理や日本家庭での生活にも積極的に挑戦する姿勢がありました。バーベキューの準備や片付けでは、自分から声をかけて手伝ってくれるなど助かりました。行き先について尋ねても「どこでも大丈夫です」と答えるなど、謙虚さも感じられました。初め

ての和室での生活やお風呂にもすぐに適応し、自然に過ごしていました。また、写真や動画を撮り、思い出やレポートに活用しようとする姿からも、日本について学び、この機会を大切にしようとする意欲が伝わってきました。

○一言でいうと、100点満点だといえる。

○日本語が堪能なので、全くといっていいほど会話には困らなかった。

○温厚で礼儀正しく話し好き、学識が高く中国の文化や歴史に精通しているとともに、日本のことについてもたくさんを知りたい学びたいという学習意欲旺盛な方だった。そのため、私たち一家としても接待のしがいがあった上に、中国のことも学ぶことができ、大変良い機会になった。

○中国の大学を卒業し、日本の日本語専門学校で学び、さらには9月以降には日本の有名私立大学の大学院を受験し、卒業後は日本に残り日本で就職したいという目標をもっている方だった。こういった学ぶ意欲があり、日本好きな方であるからこそ、ホームステイを希望したと思うが、今後もこのような方に来ていただけるのであれば、受け入れる側としてもやりやすいと思われる。

○特別な思想、宗教的な考えをもっていなかったので、安心して会話をすることができた。

○中国にいる家族の話をよくしてくれた。温かい家族に囲まれていることが感じ取れた。

○とてもまじめな方で、礼儀正しかった。使う言葉も非常に固い話し口調だったので、「普段は何を見ているのか」と聞いたが、「ニュースで勉強している」ということだった。「日本人も、そんな丁寧なことは使わないよ」と話してから、だんだん慣れてきた。

○日本語の理解には問題がなかった。

○自分の将来についても、しっかりと考えているようで、そうしたことが、日常生活から日本の言葉や文化について学ぼうという姿勢を支えているのだと感じた。

○ホームステイを通して、心を開いてくれ、中国のご家族のことも話してくれた。家族思いの好青年であった。

〈今後への希望、改善して欲しい点〉

○大学生の女の子がいるので、女子の留学生を希望した。留学生にとってもホストにとってもメリットは大きかった。すべては難しいかもしれないが、ホストと留学生のマッチングがあってもよいと思った。

○事前の個人データが参考になった。（見学場所などを決める際に参考になった。）さらに改良するならば、好きな日本食や無理な日本食とか、山梨で行ってみたいところや体験したいこと、日本の家庭への質問など、個人データの記入欄の改善や自己紹介の手紙の中に必須事項のような形で知らせていただけると、さらに充実したホームステイとなるように思う。

○今回とても貴重な経験ができました。関係スタッフの皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

○メールのやりとりで難しさがありました。Foamsのアンケート形式にして、打ち合わせの際の要項にリンクと2次元コードを記載するなど簡素化など報告書の簡便化を望みます。

また、夏休みとはいえ部活の大会等が前後にあり、他の公務も含め繁忙期なので、打ち合わせもオンライン対応が選択できるようにしていただけるとありがたいです。事業の内容や資料に個人情報を含む点からも参集が望ましいとは思いますが、資料は各地区の教育会館へ送付するなどの対応で交通費の削減も図れると思います。ご一考いただければ。

○要項をもう少し早い段階で提示いただけると、支部内での呼びかけがより広く行えると思います。ホームステイの日程自体は大きく変わらないと思いますので、「仮」の段階でも日程を示していただけると、説明もしやすくなります。ホームステイは受け入れ家庭にとっても大変貴重な経験となりますので、今後も多くの方が参加できるようになるとよいと思います。

○3万円の費用をいただけるのはたいへんありがたい。

○5人の留学生とは当日初めて顔を合わせたと言っていた。できたら事前段階で顔合わせの機会があった方がよいのではないだろうか。

○日本の子どもも同じように中国にホームステイする制度があれば希望者がいるのではないだろうか。

○3日目の交流会、その後の甲府駅集合までは電車の時刻もあり気ぜわしかった。駐車場の問題もあるので、思い切って、甲府駅集合だけでもよいかなとは思う。

(4) 留学生からの報告

山梨県・甲府市・富士川町のホームステイ

郭 溢鑫

2025年8月9日、私は興奮と緊張が入り混じった気持ちで、他の四人の学生とともに今回のホームステイ体験活動に参加しました。

午前9時頃に新宿駅で集合し、山梨県甲府市へ向かいました。甲府駅に到着後、今回のホームステイ先のホストファミリーと対面する予定でしたが、ここで少し予想外の出来事がありました。もともと私が滞在する予定だったホストの方が迎えに来られなくなり、代わりに知り合いの家族が迎えに来てくださったのです。

そのご家族は「杉田」という五人家族で、小学生の子どもが三人います。初対面のときは、私も子どもたちも緊張していましたが、しっかり挨拶をしました。ちょうど昼食の時間だったので、杉田さん一家に連れられて山梨県の名物「ほうとう」を食べに行きました。お店は和風の雰囲気が漂い、店内は畳敷きで、靴を脱いで入るスタイルでした。料理が運ばれてきたとき、驚いたのはそのボリューム。食べてみるととても美味しく、日本のラーメンや中国の麺料理とは少し違った味わいでした。

食後は、どこかで散歩しようという話になり、「昇仙峡」へ行くことに決まりました。店を出た瞬間、遠くの雲に包まれた富士山が目に入りました。残念なことは、この数日は曇りがちで時々雨も降っていたので、富士山を見る機会はほとんどありませんでした。今回のホームステイ中、富士山を見られたのはこの一度きりだったと思います。

「昇仙峡」は山の中にある溪谷です。車で山の上の駐車場まで行き、そこから滝の方向へ散歩しました。夏とはいえ、山と水に囲まれた場所では涼しい風が吹いていて、とても心地よかったです。杉田家の三人の子どもたちも元気いっぱい、打ち解けてからはよく話しかけてくれました。滝に到着すると、そこもまた美しい景色でした。

散歩の後、いよいよ私が本来滞在する予定だったホストファミリーの家へ向かいました。車の中では、杉田さん一家とずっと会話をしていた、特に多かった話題は中日両国の文化の違いについてでした。食文化、宗教、教育制度など、さまざまな面での違いを語り合いました。私は彼らに中国語で自分の名前の言い方も教えました。この交流のおかげで、日本文化への理解がさらに深まりました。

楽しい会話の後、車は目的地に到着し、今回のホームステイ先である「保坂」の家に着きました。こちらも三人の子どもがいる家庭ですが、兄たちは大学生で家にはおらず、高校二年生の弟だけが在宅していました。家は典型的な日本の一戸建てで、一階のリビングは畳敷きでキッチンとつながっており、アニメでよく見る日本の家庭の間取りにそっくりでした。二階はフローリングで、私が泊まる部屋も二階にありました。

夕食は保坂家で、昼間の杉田家も一緒に食べました。初めて知ったのですが、たこ焼きは家でも作れるんです。みんなの助けを借りて、私も三つ焼くことができました。とても楽しい体験でした。夕食はとても美味しく、二つの家族が一緒だったこともあり、とても賑やかで、初対面の緊張感もすっかりなくなっていました。移動が多かったせいか、夜は早く眠くなり、初めての場所にもかかわらず、すぐに眠りにつくことができました。



二日目の主な予定は、午前中に身延山久遠寺へ行き、午後は「かみすき館」で和紙の団扇作りを体験し、夜は温泉に入りました。久遠寺には287段の階段があり、幸いにもこの日は曇りで小雨が降っていたため、汗はあまりかきませんでした。登り切った後は少し暑く感じました。寺内には枝垂れ桜があり、桜の季節ではありませんでしたが、緑の枝が垂れ下がる様子もまた景色がありました。

午後は和紙の団扇作りを体験しました。和紙の製作から始まり、団扇の形に仕上げるまでの工程を体験し、とても不思議な感

覚でした。日本文化への理解がまた一步深まった気がします。夜は温泉に入りました。周りには温泉が苦手な人もいましたが、私は温泉が大好きなので、とても満足でした。

三日目は旅の終わりに近づいていたため、特別な観光はしませんでした。昼食には地元の特別なうどんを食べました。午後には他のホームステイ先の学生たちと合流し、交流会を開きました。そして、いよいよ別れの時間がやってきました。

名残惜しさはありましたが、それぞれが目指すべき道があります。今回の別れは、次回の再会のための一歩です。

実際、今回の活動で私が最も心を動かされたのは、美味しい食べ物でも美しい景色でもありません。もちろん、それらも大好きですが、最も印象に残ったのは、日本の家庭を実際に体験し、日本の人々と長時間にわたる国際的、文化的交流ができたことです。これこそが私にとって最も魅力的で、最も貴重な経験でした。

三日間、夜になって初めて気づいたのですが、私は一日中中国語を話していなかったのです。新しいことを体験するたびに、日本への理解が少しずつ深まっていくのを感じました。また、家族との会話の中で、中国と日本の違いについても多く話しました。相手は日本の文化を紹介してくれ、私はそれに対応する中国の文化や違いを共有しました。

今回参加した家庭はすべて教員の家庭であり、私が将来学びたい分野も教育に関係しています。そのため、教育に関する話題では、二人の先生から多くの知識を得ることができました。また、私自身が受けてきた中国の教育についても紹介し、日中両国の教育制度の違いを比較しました。このような文化交流こそが、今回のホームステイ活動で私が得た最大の成果です。この活動のおかげで、美しい景色を見て、美味しい食べ物を味わうだけでなく、貴重な国際文化交流の機会を得ることができました。これは、私にとって忘れられない大切な思い出になると信じています。

「一生の宝物」山梨ホームステイの思い出

王 泰一

八月九日午前中、新宿からかいじ特急列車を乗って甲府駅に向けて出発した。山梨県でとても楽しい時間を過ごした。

この度、最も印象深いものは日本の食べ物のことだ。甲府駅に着いたら、ホームステイファミリーの家族に日本食のそばを食べに連れて行ってもらった。つゆにしっかり味を染みたり、塩をかけたり、とろろと一緒に食べたりといったいろいろ昔は知らなかった食べ方を教えてもらった。うまくて何回もおかわりを頼んだ。そして二日目は、吉田の名物である硬いうどんを楽しめた。普段自分が作ったうどんと異なり、とても新鮮な体験ができた。少し硬いにもかかわらず、旨味はしっかり染み込んでいて、美味しかった。三日目は山梨県しかないほうとうを食べさせてもらった。味噌の味で作ってきた料理が初めて見たが、こだわりでうまかった。他にも納豆や桔梗信玄餅の初体験ができた。日本人が長生きのカギの一つと言われる納豆は思ったより倍以上美味しく、食欲をそそり出した。ファミリー家族にも桔梗信玄餅の伝統的な食べ方を教えてもらった。このような様々な美食によって日本の食べ物へより深く知るようになって、日本食の魅力を感じるようになったと思う。

いろいろ有名な観光地へも行った。二日目は富士山を見に行った。まずはロープウェイを乗って河口湖周辺の観光台で富士山を眺めてみた。その後山中湖へ行った。そこで急に風が吹き、湖が荒れた。波がすごい勢いで岸を叩き、曇りの中に隠れていた富士山も姿を現しつつあった。これは珍しい光景だとファミリー家族に言われて、本当にラッキーだなと感じていた。三日目は武田信玄のお墓の恵林寺に参った。広い和室があれば、静かで

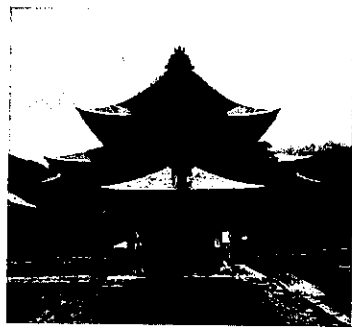


居心地が良い庭もあって、日本っぽいところだった。私もこのような人を落ち着けさせるところに一度住んでみたいと思うようになった。

最も興味深いのは善光寺の「鳴き竜」だった。金堂に入るとすぐに天井に大きな龍が現れて、その「鳴き龍」の下で手をパチッとたたくと、共鳴がおこってきびっくりした。調べると龍が描かれている部分が吊り天井になっているから、共鳴が起こるそう。そして善光寺では特殊「お戒壇巡り」がある。闇の中で壁を模索しながら前に進むことによって、心や人生のことを見直す機会になり、新しい思考ができると言われる。何も見えずに歩くので最初は少し緊張したが、試して何を考えてみようとする、頭の中に浮かび上がったのは来日する前に家族からの語りや試験合格のために流した汗だった。そして角を曲げてようやく光が見えるようになった時、まるで、「これから先もきっと輝く未来が待っているよ」のように、神様に教えていただいた。とても有意義な体験だと思う。

もう一つ面白いことは、この三日間の生活上のことだった。ファミリー家族に畳の和室を用意してもらった。ベットに比べて少し硬いが、意外と居心地がよかった。東京では寝つきが悪くて寝られなかったり、寝坊したりすることが多いが、ここでは全然違った。夜横になるとすぐに寝られて、ぐっすりして翌日の六時ごろ自然に目が覚めた。甲府市は静かからか、ファミリー家族の優しさを感じて安心したからか、不思議なことだと思う。

今回のホームステイによって、かけがえのない体験ができて、食べ物、歴史、文化などを含む日本のことをより知ることになった。非日常的な体験ができて、うれしかった。それに何より大切なのはファミリー家族など人々とのつながりができたと思う。これからもこの記憶を一生の宝物として大切に、日本での生活を送っていききたいと思う。



「貴重な思い出」山梨ホームステイ

田 林 艶

私の片親家庭生活はもう十年以上です。今度のホストファミリーを契機にして、もう一度完全で幸せな家庭生活を久しぶりに感じました。どうもありがとうございました。

家庭と今まで自分の人生経験なので、私は外向的な人ですが、実際に、心が内向的です。それに、私の日本語のレベルも低いので、言うてはいけなことを言ったのを恐れています。それで、時々黙っています。しかし、私はよそよそしいひとではありません。逆に、言いたいことがいっぱいあります。

私のホストファミリーの家族はみんな優しいです。お父さんとお母さんは偉いと思います。教員として、真面目で働いています。両親として、子供に愛情を注いで育てあげます。そんなに優秀な両親がいるからこそ、優秀な子供がいます。姉のなごみは勉強の為に、いつも忙しいです。自分の夢の為に、しっかりと努力する彼女は輝かしいです。お母さんと同じで、自立でタフです。兄の謙太郎は万能的な人だと思います。サッカーや書道など、色々なことが得意です。彼はいつも私に「大丈夫、安心して。」と言いました。魔法師のように、私にリラックスさせる能力を持っています。弟の蒼次郎は、世の中に、一番可愛い子供だと思います。彼は善良で正直です。今でも、山梨を離れた時、彼は私に暖かいハグをくれたのが忘れられません。

山梨に行く前に、お母さんはわざわざイメージを送ってくれました。「タオルとか布団とか、日用品をもう用意しておきました、別に持って来なくてもいいです。」だから、私は山梨に行った時、少ない荷物を持って行きました。山梨を離れた時、荷物は多くなりました。両親にももらったプレゼントがいっぱいです。それは両親の気



遣いだと思います。言葉で表現できない感情は、重い荷物で表現します。

帰る車を待っていた時、向かいの廊下ですっと手を振っている家族を見ました。私は本当に惜しいです。人生には別れに慣れることが必要なことを知っていますが、別れのせいで、思わず涙を流しました。

チャンスがあれば、もう一度弟がピアノを弾くのを聴きながら、庭に座っていたいです。実は、そのようなんびりした生活は、元々、私が一生の目標です。ホストファミリーのおかげさまで、早めに体験しました。

ファミリーと一緒に過ごした時間は、私の貴重な思い出になりました。その思い出を大切に、より良い自分になります。両親のような他人に美しいのをもたらすことができる人になりますし、兄弟のような明るくて温かい人になります。お世話になりました、誠にありがとうございました。ずっと寂しいです。

「つながりの大切さを実感」山梨ホームステイ

栄 西 嘉

山梨県で過ごした三日間のホームステイは、振り返ると、一つの場面が、静かに心に残っています。

初日は富士山を訪れました。雨のため富士山の姿を見ることはできませんでしたが、湖を渡る船やロープウェイからの景色を通して、山梨の自然の広さを感じることができました。期待していた風景とは違っていました、「見えなかったこと」も含めて、今では大切な思い出の一つになっています。

夜には女子校を訪問しました。生徒たちが元気いっぱい体を動かしている姿がとても印象的で、強い活力を感じました。留学生である私に興味を持ち、たくさん質問をしてくれた姿がとても可愛らしく、緊張していた気持ちも次第に和らいでいきました。



二日目は、初めての体験が続きました。和紙作りでは、毛筆で字を書いたことはありましたが、和紙そのものを作る体験は初めてでした。水の中で繊維をすくい上げる作業は思っていた以上に難しく、最初はうまくいかず戸惑いました。しかし、力加減や動かし方によって紙の厚さが変わることに気づくにつれ、少しずつ面白さも感じられるようになりました。一枚の紙が完成するまでに多くの手間と時間がかかっていることを知り、日本のものづくりの丁寧さを実感しました。

その後、金山で砂金採りを体験しました。最初はあまり期待せず、皆と同じように手順に従って作業をしていましたが、実際にやってみると想像以上に根気のいる作業でした。何度もふるいにかけても残るのはわずかな砂粒だけで、ほとんど砂金は採れませんでした。それでも、作業に集中しているうちに心が落ち着いていき、結果よりも過程そのものを楽しんでいる自分に気づきました。この体験は、とても現実的で心に残るものとなりました。

夜は皆でバーベキューをしました。食材を焼きながら自然と会話が生まれ、同じ時間を共有していることがとても心地よく感じられ



ました。自分たちの手で作った料理はいつもより美味しく感じられ、分け合って食べることで楽しさも増したように思います。その後に見た花火は、夜空に静かに広がっていく様子が印象的で、一日の終わりに穏やかな余韻を残してくれました。

三日目はハイジの隠れ家を訪れました。曇り空にもかかわらず、一面に広がる向日葵はとても明るく、強く印象に残っています。また、小さな金魚にえさをあげる体験を通して、周りの人と自然に会話が生まれ、心の緊張もいつの間にか和らいでいました。

この三日間のホームステイを通して、多くの美味しい料理を味わうと同時に、日本と中国の生活文化の違いにも気づくことができました。例えば、日本では食事の前後に、「いただきます」や「ごちそうさまでした」と言葉で感謝の気持ちを表すことや、家族でゆっくり会話をしながら食事の時間を大切にしている点が印象に残りました。

また、ホームステイ先の方々にはこの三日間大変お世話になりました。私は少し恥ずかしがり屋な性格ですが、皆さんが温かく接してくださったおかげで、安心して過ごすことができました。帰りの電車に乗ったときには強い名残惜しさを感じ、この短い時間の中で生まれたつながりの大切さを改めて実感しました。

楽しい三日間のホームステイ

談 月

一日目：

朝9時、私たち5人は新宿駅で集合しました。甲府駅行きの列車の出発とともに、2泊3日のホームステイ旅行が開幕しました。目的地に到着してから、ホストファミリーと合流し、簡単なセレモニーが終わった後、時田さんのご家族と一緒に家へ向かいました。時田さんの家は想像よりずいぶん広くて、家だけでなく畑や駐車場、倉庫までもあることに驚きました。

お昼になると、時田さんのご家族と一緒に「小作」というお店で本場の山梨料理—ほうとうを食べました。中国の刀削麺に形が少し似ていますが、味と食材は全然違います。ほうとうの面はよりもちもちしていて、味噌ベースのしっかりした味わいがあり、ジャガイモや里芋、かぼちゃなどの野菜とチャーシューがたっぷり入れて、とても幸せな味がしました。

食事後、時田さんの娘さんと息子さんと一緒に桃狩りに行きました。どの桃も大きくて真っ赤に色づき、甘い匂いが漂っていました。その後、夜のBBQの準備ために、いくつかのスーパーを回り、牛肉や野菜など幅広い食材を買って帰宅しました。

家に着くと、みんなで食材を下ごしらえしたり、炭に火を起こしたりして、BBQが始まりました。買ってきた食材は新鮮だし、ソースも食材の味とぴったり合っていたし、人生で初めてのBBQでこんなにおいしい焼き物を食べさせてくれて、本当に楽しかったです。

夜も初めて畳で寝ました。畳がベッドより快適だなんて、全然想像していませんでした。元気いっぱい愉快地一日でしたね！

二日目：

今日の朝ご飯は時田さんが作ってくれた味噌汁、ハムエッグ、そして和え物でした。味噌汁に春雨、人参、キノコ、がんもどきなどが入っていて、日本っぽくてとてもおいしかったです。

食事後、富士山を見に行く予定でしたが、雨が降ったりやんだりしていて、見られないかもしれないと思いま



した。その代わりに、富士急ハイランドに行くことにしました。そこで、「進撃の巨人 ザ・ライド」に乗り、まるで本当に立体機動装置を使って巨人を倒しているかのような、今までない爽快感と刺激を味わいました。お昼は園内でずっと食べたかったナルトの一楽ラーメンを食べて大満足でした。

富士急ハイランドを離れてから、河口湖を経由して富士山の写真を撮りに行きました。雲に包まれていても富士山の美しさは隠せず、むしろ独特な味わいがあるように感じました。その後、ある古墳の上で甲府市の全貌を見下ろしてから家に帰りました。

帰宅後、食材の準備が終わった後、手巻き寿司を食べ始めました。初めてだったので、娘さんが作り方を教えてくれました。パリパリの海苔、ふんわりとした白ごはん、そして好きな魚の旨味は自分で巻く楽しさと相まって、一口で幸せを感じました。

食べ終わった後、時田さんの娘さんと息子さんと一緒にスイッチをしたり、「人生ゲーム」をしたりして、とても楽しかったです。とても充実して幸せな一日が終わりました。

三日目：

今日の朝ご飯はチキンサラダ、醤油ナス、そして時田さん特製の味噌汁でした。いつもの通り、すごくおいしかったです。

その後、ステンドグラスの作りを体験しました。優しい先生の指導のもとで、主にはんだという技法を使って作品を仕上げました。窓から差し込む太陽の光に照らされたステンドグラスは、なんとも言えない美しさを感じられます。

お昼にカレーうどんを食べに行き、甘くてとても気に入りました。

午後、甲府駅でたくさんのお土産を購入し、東京行きの列車に乗りました。列車の出発とともに、山梨でのホームステイの旅は正式に終了しました。

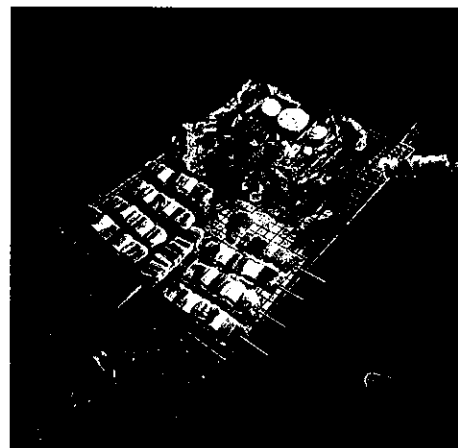
まとめの感想：

この短い三日間に、たくさんの「初めて」と「一番」を経験しました。初めてのBBQ、初めての量での就寝、初めての手巻き寿司、初めてのステンドグラス作り。一番おいしかった料理はほうとうで、一番美味しかった果物はも桃で、一番驚いたのは手巻き寿司と家の広さで、一番好きなアトラクションは「進撃の巨人ザ・ライド」、一番面白かったのはステンドグラス作りです。今年の夏休みに最も楽しく印象深い三日間でした。

文化体験はもちろん、時田さんのご家族の温かさも強く心に残りました。時田さんは優しく細心で、私の話した小さなことまで覚えてくれていました。例えば、私が筑前煮が好きだと言うと、翌日にすぐ買ってきてくれたり、「進撃の巨人」が好きだと言うと、次の日にそのアトラクションに連れて行ってくれたりしました。また、お子さんたちも全員優しくて優秀で、自分なりの特技と個性を持っていて、誰もが私にとってお手本のような存在でした。家族みんなのんびりで自由で賑やかに暮らしています。

日本語力の面で、進歩もあり、不足も発見し、さまざまな気づきがありました。三日間のホームステイを通して、生活に関する多くの単語を学びました。例えば、「天井と天重」、「昆布とわかめ」の違いが分かるようになったり、若者言葉や様々なアトラクションの日本語も覚えたりしました。会話力と聴解力が上がるだけでなく、何よりも本物の日本人と話す勇気が出るようになりました。一方で、語彙力が足りないとか、日本人同士の会話はまだ全て聞き取れないとか、いろんな不足も発見しました。日本語だけの環境が日本語の勉強にとって最も重要なポイントであることも肌で感じました。

要するに、日本人の平凡な暮らしを直接体験できたこの貴重な機会に心から感謝しています。この三日間は、私にとって人生で特別な三日間となりました。



第8回日中教育文化交流シンポジウム（教育交流 研究等助成事業）

今年度のシンポジウムは、一部を「第21回日本語作文コンクール」の最優秀賞受賞者朱 恒宇（大連外国語大学）の作文発表「『押し活』で生まれた新しい日中交流」を基調として、日中の教育文化交流について考え、その方向性を探る取り組みとしました。そして、第二部は、若狭谷理紗（東京芸術大学4年生）と楊 清（法政大学大学院入学予定者）を加え3人のシンポジストによる「日中教育文化交流の意義について考える」を行いました。

このシンポジウムを通して「日中教育文化交流の意義」について、より深く検証し、今後の日中教育文化交流の展望や課題に焦点を当てるといふ成果を上げることができました。



（1）実施要項

- 1 実施目的 ○日中教育交流の意義についての理解を深め、今後の取り組みの在り方について考える機会とする。
- 2 実施日時 2026年3月6日（金）14：00～17：00
- 3 実施場所 日本教育会館707会議室
- 4 参加者 ・協会顧問・理事・評議員・公益事業審査委員・会員・団体会員他（計66名）
- 5 内 容 中国人学生・留学生・日本人学生との意見交流
・コーディネーター
中村武志（協会代表理事）
・シンポジスト
テーマ①「『押し活』で生まれた新しい日中交流」
朱 恒宇（大連外国語大学 日本語作文コンクール最優秀賞）
テーマ②「日中教育文化交流の意義について考える」
朱 恒宇（大連外国語大学 日本語作文コンクール最優秀賞）
若狭谷理紗（東京芸術大学4年生 忘れられない中国滞在エピソード受賞者）
楊 清（湖南省吉首大学 法政大学大学院入学予定者）
- 6 日 程 シンポジウム
13：30 開場・受付
14：00 開会 司会 赤岡直人（協会業務執行理事）
代表理事挨拶 中村武志
顧問挨拶 興石 東（元参議院副議長）
14：10 シンポジストに係る二つの作文コンクールの紹介
段 躍中 日中交流研究所長
14：20 「中国人学生との意見交流」
意見発表（各自約10分）―意見交換（参加者）
総括（コーディネーター）
※テーマ①・テーマ②で実施し、途中休憩を取ります。
17：00 閉会

（2）内容報告

①第1部

朱 恒宇さんの基調発表は、基本的には「第21回中国人の日本語作文コンクール」で最優秀賞を受賞した「テーマ『押し活』で生まれた新しい日中交流～ユーザーコメントでつながる心」での内容をもとに、「言葉の違いは壁ではなく窓なんだ」という主張を展開しました。

大学入学の時に、「偶然」学ぶことになった日本語の繊細さや思いやりに満ちた表現に、次第にひかれて行ったことが話されました。そして、さらには、日本からの交換留学生と知り合い、交流を重ねる中で、「言葉は単なるコミュニケーションの道具ではなく、人と人の心をつなぐ大切な役割を果たしているんだ」ということに気づかされたことが話されました。言語について考えるとき、言葉そのものよりもその言葉の背景を理解することの大切さに触れた話がありました。日本語の言葉と中国語の言葉、似ているような言葉でもその使われ方やニュアンス意味するところの微妙な違いは、やはり文化の違いを表している指摘されました。それゆえに、お互いの言葉について交流し理解を深めていくことは、お互いの国の文化理解・交流につながっていくという考えが示されました。日本語の「推し」と中国語の「本命」は近いがニュアンスが完全に一致しないが、その概念を比較する形で紹介し合っていけば文化の違いを理解し合っていけるという具体的な例も話されました。そして、言葉の壁を超えるのは簡単ではないが、小さな共感や発見の積み重ねが、両国の未来の橋を築くと信じていると話され、自分はその懸け橋の一人になって活動していきたいと発表を結びました。

朱さんの発表について、日本語に興味を持つきっかけとしての、アニメ・コミック・ゲームのこと、日本語の学習で話すことよりもむしろ書くことが大切、日本語学校での学習の効果、アルバイトを通しての良い経験等のことについて質疑が行われました。

②第2部

朱さんの基調発表に続いて、中国での滞在経験（中学・高校在学経験）を持つ若狭谷理紗さんと日本留学中の楊 清さんが、「日中教育文化交流の意義について考える」ということで、意見発表しました。

若狭谷理紗さんの発表は、「忘れられない中国滞在エピソード」で入賞した作文の内容を踏まえての話でした。若狭谷さんは、お父さんの仕事の関係で、小学校4年生から高校卒業までを中国大連市で過ごしました。中国での生活、特に小学校は日本人学校に通いましたが、中学校・高校は現地の中国の学校に通ったことで得た体験が話されました。また、帰国してからは「中国との出会い・関わりを大切にしていきたい」という考えから、日中関係に係る活動やイベントに積極的に参加したり、中国の学生たちに日本語指導をするアルバイトをしたりと取り組んできた体験も話されました。さらには、現在中国の友人たちとアニメについて、SNSを通じて交流し共同製作したりしていることも話されました。今回、そうした体験を通して気付いたこと考えたことを、「日中教育文化交流の意義を考える」という視点に立って発表していただきました。若狭谷さんは、現在東京芸術大学の学生ということもあり、日本と中国の絵画の歴史や特徴、相互に影響を及ぼってきた時代や現在の関係も話していただきました。さらに、学校教育における絵画指導の特徴について比較的に話していただきました。

発表後の質疑では、中国の特に学校生活の中で大変だったこと、言語の問題、制服・部活・日課時程等の学校生活の特徴、絵画や絵画指導の特徴など多くの話し合いがなされました。「中国語習得のために特に取り組んだことは？」という質問に、「中国の国語の教科書を、また、家の中の目に付く壁に中国の古詩を貼りどちらも丸暗記した」として、「中国の友達たちと沢山会話をした」と話され、共感を得ていました。

楊 清さんの発表は、中国で日本語勉強し、日本に留学して日本語学校での学習にはげみ、ついにN1に合格したこと、そうした中で努力しなければ道は開けない、自分の目標の達成について強い信念を持たなければだめだということを感じたという話がありました。そして、日本に来て日本語学校での学習を通して、日本語人というテーマに、強く心を動かされたことが話されました。日本語人とは、日本人かどうかとか単に日本語能力の高さとかそういった捉えではなく、日本語を学び他者との関わりを持ちながら生きる人で、日本語で考え・悩み・成長している人のことだと話してくれました。日本語学習の一日は、朝予習・昼は日本語学校で授業・夜は復習と取り組み、日本語人を意識して大学院へ進学することができたことが話されました。そしてまた一方、経済的理由もあって食堂の調理場でアルバイトをしている中で、「いただきます」「ごちそうさまでした」のような日

本のものの考え方、習慣や文化知ることができたこと、さらに日本の文化を受け入れるだけでなく、中国のことも話せるようになったことで、日本語人としての成長を感じているという話がありました。日本語人という言葉は、とてもインパクトがあるという発表でした。4月からは大学院生ということで、経営学の専門的な知識を身につけたいと話していました。その思いの一つには、楊さんの家は、小さな商店で決して経済的に恵まれはなかったが、両親は陽さんを育て大学まで行かせてくれ、さらには日本へ留学までさせてくれたことへの感謝と尊敬の気持ちがあると話されました。日本でより大きな視野を持ち、日本社会への理解を深め、日本と中国の間で将来役立つそんな人間になりたいという考えを話されました。少子高齢化が進む日本、その中で日本社会の価値観やルールを学びながら、日本語人として日本社会に貢献したいという決意も示されました。

発表後の質疑では、日本語人として日本で過ごしながら感じていること、しっかりとした目標や信念を持つことで困難や挫折を克服できることなどが話されました。

全体での質疑や意見発表の中では、中国も日本も直面している少子高齢化の進行の中で、中国では子どもを大切に「子どもは祖国の花」ということの意味、日中両国の文化交流を進めるために両国での留学が大切だ、交流によってよりよい社会になるなどが話されました。

最後に3人それぞれから、将来どんな活躍をしたいかが話されました。

朱 恒宇さん「経営を学び、日中貿易に関わる仕事につきたい。」

若狭谷理紗さん「デザイナーになって、日中両国にまたがるデザイナーの会社で働きたい。」

楊 清さん「中国人に対する『思い込み』を、自らが日本語人としてしっかり生きることで変えたい。貿易に関わる仕事につきたい。」

中村コーディネーターのまとめとして、

- ・日本語人という言葉の意味を知り、考え、実践することの大切さが確認された。
- ・SNSを通して交流している日中両国の若い人の言葉の展開に、改めて驚かされた。
- ・違いを優越ととらえないで、そこを相互理解の始まりとしてとらえ、違うところから学び、理解に変えて行くことの大切さを改めて確認できた。日中をはじめとする国際交流には、まだまだ出番が沢山あると感じた。

第2回 田中一郎記念奨学基金日本語作文コンクール（教育交流 研究等助成事業）

2025年度第2回田中一郎記念奨学基金日本語作文コンクールを実施しました。奨学基金の事業として、ここ数年来の懸案でした。中国人留学生以外を対象とする事業を展開し、具体的に日本語教育・日本との文化交流、そして就学の援助へとつながり発展する形での取り組みとして、日本語作文コンクールは大いに意義ある取り組みとなりました。

沢山の作品の中から、10点を入選作品として選んでいただきました。そして、その入選作品の中から5点を、優秀賞として、公益事業検討委員の5名に、内容40点、文法30点、表現30点の合計100点満点で、採点していただき、その合計点で選出しました。

どの入選作品を見ても、内容が素晴らしく、良い取り組みになりました。入選者には、以下の奨学金を表彰状と一緒に渡しました。

★優秀賞（3万円）5名

★入 選（1万円）5名



（1）第2回 田中一郎記念奨学基金日本語作文コンクール実施要項

1. 目 的 将来への夢や希望をもって、日本語学習に取り組んでいる留学生を対象に、学習の励みとなり、また、直接学習の成果にもつながる「日本語作文コンクール」を実施し、すぐれた作品執筆者に賞を付与することで、今後の日本語学習の支援を行う。
2. 期 日 募集期間 2026年1月19日(月)～2月6日(金)
第1次審査 2月6日(金)～2月16日(月)
第2次審査 2月17日(火)～2月27日(金)
表彰式 3月5日(木)・6日(金)
3. 募集内容 (1)募集方法
 - ・中国からの留学生以外を作文募集の対象とする
 - ・作文の呼びかけ・取りまとめは、日本語学校の先生方を通して行う。(2)テーマ
 - ①日本語学校で学んで
 - ②文化の違いに気づいた
 - ③私の見つけた日本
 - ④私の好きな日本語(3)字数
 - 第1次審査 400字
 - 第2次審査 1000字
4. 審 査 (1)1次審査は、フジ国際語学院の石塚憲子先生を責任者として、担当の先生方に行っていただく。
(2)2次審査は、日本中国国際教育交流協会公益事業審査委員が行う。
(3)作文について、内容40点・文法30点・表現30点の合計100点満点での得点で評価する。
(4)第1次審査で10名を入選とする。第2次審査では、入選者の中から優秀賞5名を選考する。
5. 賞 (1)優秀賞・入選者とも賞状を授与する。
(2)優秀賞者（5名）には奨学金として3万円を、入選者（5名）には1万円を授与する。

6. その他 (1)この事業は、公益財団法人日本中国国際教育交流協会の研究等助成事業の一つとして実施する。
- (2)募集等の具体的な取り組みについては、フジ国際語学院に協力をお願いします。

(2) 入選者名簿

	氏 名	出身国	題 名	入 賞
1	タパ・マガル・メリナ THAPA MAGAR MELINA	ネパール	私の見つけた日本	優秀
2	アイディ・ダン・バハドル AIDI DAN BAHADUR	ネパール	日本語学校で学んだこと	
3	グエン・ティ・ニュ・クイン NGUYEN THI NHU QUYNH	ベトナム	日本語学校で学んだこと	優秀
4	オユンエルデネ LKHAGVABYAMBA OYUN-ERDENE	モンゴル	私の好きな日本語	
5	グエン・ティ・キム・チ NGUYEN THI KIM CHI	ベトナム	私の好きな日本語	優秀
6	グエン・ティ・タン・タム NGUYEN THI THANH TAM	ベトナム	日本語学校で学んだこと	
7	タパ・デバキ・マヤ THAPA DEBAKI MAYA	ネパール	日本語学校で学んだこと	
8	タン・ニー DINH NGOC THANH NHI	ベトナム	私の見つけた日本	
9	ギシン・アニル・クマル GHISING ANIL KUMAR	ネパール	私の見つけた日本	優秀
10	ホン・ニユン NGUYEN THI HONG NHUNG	ベトナム	私の好きな日本語	優秀

(3) 優秀作品

私の見つけた日本

タパ・マガル・メリナ
THAPA MAGAR MELINA

私は2024年4月にネパールから参りました。今、富士日本語学校で日本語を勉強しております。この2年間、日本で生活しながら日本の文化について深く学ぶことができました。

まず、日本の文化の中で私が最も素晴らしいと感じたことは礼儀やマナーを大切にすることです。日本では、日常のあいさつをとっても大切にしています。「おはようございます」や「ありがとうございます」などの言葉を相手の目を見て言う人が多いです。私はこのような習慣から、日本人は相手の気持ちを考えて行動していると学びました。

次に、日本人の四季を大切にすることの方に強い印象を受けました。春の花見、夏の祭り、秋の紅葉、冬のお正月など、季節ごとに行事があります。これらの行事を通して、日本人は自然と共に生きる心を大切にしていると感じました。この考え方は、私自身の考え方も変えてくれました。

そして、日本の食文化からも多くのことを学びました。日本の食事は栄養のバランスがよく、見た目も美しいです。食事の前に「いただきます」食事の後に「ごちそうさまでした」という習慣には、野菜や米を作ってくれている農家の方、料理を作ってくれた人、肉や魚など命をいただいているという感謝の気持ちが込められています。私はこの文化をとっても素晴らしいと感じ、今では毎日意識して使っています。

さらに、日本では時間を守ることの大切さを強く感じました。電車やバスが時間通りに来ることは、日本の社会が信頼で成り立っている証拠だと思います。私も日本で生活する中で時間を守る意識が高まりました。また、学校生活を通して、協力することの大切さを学びました。掃除やグループ活動を通して、みんなで助け合う姿勢が身につきました。先生方は、努力する学生をしっかりと見て、温かく指導してくださいます。このような学習環境に心から感謝しています。

日本に来たばかりのころは言葉や文化のちがいに戸惑うこともありましたが、その経験があったからこそ、今の成長があると思います。失敗を恐れずに学ぶことの大切さを日本で学びました。

最後に、日本の文化は思いやり、感謝、そして調和を大切にする文化だと思います。私は留学生として日本で学んだことを大切に、今後の勉強や将来に生かしていきたいです。

日本語学校で学んだこと

グエン・ティ・ニュ・クイン
NGUYEN THI NHU QUYNH

私が日本語学校で学んだことの一つは、「諦めないこと」の大切さです。

私はクラスの中で他の学生より五歳から十歳ほど年上です。そのため、新しい言葉や漢字を覚えるのが、若い彼らより遅く、日本語という外国語の学習が大変だと感じることもよくありました。それを補うために毎日、自宅での学習を欠かさず行い、クラスメイトに遅れをとらないように頑張りました。

しかし、日本語学校に通いながら、アルバイトをしていたので、心も体も疲れ果てて、勉強する気力が起きないこともありました。事実、私は2025年7月のJLPTではN3に不合格になってしまいました。その時は悔しくて、次は必ず合格すると決意し、不合格だと分かった日から少しずつ勉強時間を増やしました。一度不合格になってから、次の試験までの半年、どんなに疲れていても、不合格だった悔しさを思い出し、毎日勉強することができました。その結果、2025年の12月ではN3に合格することができました。留学生として日本に来ていちばん嬉しい出来事でした。努力が必ず良い結果につながるとは限りません。でもそのときは日本語の神様が私に微笑んでくれたようです。日本語学校卒業後は専門学校に進学する予定です。新しい目標を見つけ、これからも小さな努力を毎日積み重ねて行くつもりです。

日本語学校では、日本語だけでなく、文化の違いなどいろいろな面白いことも学びました。私のクラスには私と同じベトナム人をはじめ、ネパール、バングラデシュ、スリランカから来た学生がいます。日本語学校のクラスメイトとなったことで文化交流をすることができました。

例えば、ボディランゲージについて勉強した時、同じ小指を立てる動作でも、国によって意味が異なることが分かりました。日本では「約束」、ネパールやバングラデシュでは、「トイレに行きたい」、ベトナムでは「小さい」や「子供」という意味になります。このような違いを知ると、クラスメイトみんなが楽しくなり、教室が明るい雰囲気になりました。

最後に、もし日本への留学を考えている人がいれば、ぜひ挑戦してみてほしいと伝えたいです。新しいところへ行くことで、視野が広がります。新しい体験ができます。私は日本へ来てよかったと考えています。

私の好きな日本語

グエン・ティ・キム・チ
NGUYEN THI KIM CHI

私が好きな日本語は「おもてなし」という言葉です。

おもてなしとは、見返りを求めず、相手の立場に立って先回りした気遣いや、心からの歓迎の気持ちで接する日本独自の文化だと思います。

例えば、客が家に来る前に部屋をきれいに掃除し、相手の好みを考えてお茶やお菓子を用意しておく行動は、おもてなしだと思います。また、レストランで店員が客に言われる前にコップの水が少なくなっていることに気

づいて静かに注いでくれたり、雨の日に傘を準備してくれたりするもの、おもてなしの一例です。私がこの言葉を知ったのは、ベトナムで日本に留学しようと決めたとき、日本文化について調べたことがきっかけです。その時初めて「おもてなし」という言葉を聞いて、日本は相手のことを大切にすることを大切に感じる国なんだと感じ、温かい気持ちになりました。

最初は日本での生活に少し不安もありましたが実際に日本に来て、とてもびっくりしました。道に迷ったとき、場所を説明するだけでなく、一緒にそこまで連れて行ってくれたことがありました。また電車やバスでは、お年寄りや妊婦に席を譲る人を何度も見たことがあります。お店では、客が困らないようにやさしく対応してくれますし、雨の日には傘にビニールをつけてくれることもあります。

このような行動を見て、日本人は本当に親切だと感じました。そして、「おもてなし」という言葉の意味を実際の生活の中で強く実感しました。

ベトナムにも親切にする文化はありますが、「おもてなし」のように相手のことを先に考えて行動するという考え方を一つ言葉で表すことはあまりないと思います。

日本で約2年間生活する中で、ニュースでベトナムの人の犯罪が報道されているのを見たこともあります。そのため、日本に住んでいる外国人のイメージが悪くなり、日本のおもてなしがあまり見られなくなってしまうのではないかと、心配になることもあります。だからこそ、日本で生活している間、私も周りの人に対しておもてなしの気持ちで接したいと思いました。例えば、困っている人がいたら自分から声をかけたりなど、相手の立場になって考えて行動できる人になりたいです。

日本で経験したたくさんの親切な出来事が結びついているので、今でもこの「おもてなし」という言葉をはっきり覚えています。だから私はこの言葉が大好きです。

私の見つけた日本

ギシン・アニル・クマル
GHISING ANIL KUMAR

私が日本に来てから、二年が過ぎました。日本に来る前、私は日本についてスマートフォンでいろいろ調べて、技術が進んでいる国だと思っていました。しかし、実際に日本で生活してみると、想像していた以上に「新しい日本」をたくさん見つけることができました。

一番印象に残っているのは、日本のサービスと人々の思いやりです。ある日、私は初めて一人で電車に乗ってアルバイトの面接に行こうとしました。しかし、電車に乗る場所が分からず、困ってしまいました。すると、困っている私に気づいた駅員さんが「どうしましたか」と優しく声をかけてくれました。私がたどたどしい日本語で目的地を伝え、その駅員さんは道を教えるだけでなく、電車に乗るホームまで案内してくれました。そのおかげで、私は予定していた場所まで無事に行くことができました。

この経験を通して、私は日本の「おもてなし」という言葉を少しずつ理解し始めました。相手が何を求めているのかを考え、親切に行動する心は、特別な場所だけでなく、日常生活の中でも多く見られます。例えば、雨の日に買い物をしたとき、店員さんが袋にビニールのカバーをかけてくれることがあります。これは荷物がぬれないようにという小さな配慮です。

また、日本では多くの人がルールを守ることも印象的でした。電車を待つとき、みんなが自然に列に並びます。誰かに注意されなくても順番を守るのは、社会全体の安心につながるからだと思います。最初は厳しく感じることもありましたが、今ではそのルールのおかげで毎日気持ちよく生活できていると感じています。

もちろん、日本語の勉強は難しく、大変なこともあります。しかし、日本で出会った人々の温かさや優しさは、私にとって大きな支えになっています。日本という国は便利だけでなく、他人を思いやる心が町のあちこちにあふれている国だと思います。

これからも日本での経験を大切にしながら、もっと日本語を上達させ、さらに多くの日本を見つけていきたいです。そして、いつか自分の国に帰ったとき、日本で学んだ優しさやおもてなしの心を、自分の国の人たちにも伝えていきたいと思っています。

私の好きな日本語

ホン・ニョン
NGUYEN THI HONG NHUNG

日本人は食事が終わったとき、よく「ごちそうさま」という言葉を使っています。これは、私が気に入っている言葉です。

「ごちそうさま」は、漢字で「御馳走様」と書きます。この言葉が、食後のあいさつとして用いられるようになったのは、江戸時代後半頃からだと言われていますが、今、「ごちそうさま」は単なる食後の一言ではなく、いろいろな意味をもっています。「ごちそうになりました」と「おいしい食事を作ってくれてありがとうございます」という気持ちを伝える言葉です。お米を作ってくれた農家さん、魚を採ってくれた漁師さんといった、手を尽くしてくれた人、そして料理を作ってくれた人や食材となった肉、魚や野菜などの生き物の命をいただいた感謝が込められています。つまり、「ごちそうさま」は、食事への敬意と、関わったすべての人への感謝を表す言葉であり、日本の食文化の重要な一面です。

今は食べ物があふれていて、平気で捨てたり残したり、食材を無駄に捨てたりすることも多くなりがちです。だからこそ、その食材や料理ができあがるまでにはいろいろな人の苦労や努力が宿っているのを知ることが必要です。そうすれば、食べ物を捨てることが少なくなってくるのではないのでしょうか。

海外では、食前に神様に感謝をするという習慣はあるようですが、食後に命に対して、また、食事に関わった人への感謝の気持ちを伝える言葉は見られません。日本に住んだのをきっかけに、その言葉を知ります。そのおかげで、手間をかけて料理を作ってくれた人への感謝の気持ちを学び、勉強になりました。そして、私の考えや行動に大きな影響を与えました。今は、もったいないことをしないように、料理を大切にするようにしています。買い物をする前に、家にある食品の在庫を確認します。また、買い物のとき買いすぎないように、必要なものを必要な分だけ買います。余った食品は冷凍保存したり、消費期限や賞味期限をこまめに確認して期限前に使い切ったりして、食品を無駄にしないようにしています。食べきれない量だけ作り、残さず食べるようにしています。食べ放題に行くと、食べたいだけ食べてもいいと言われますが、食べ物を無駄にしないように、いつも少しずつ注文しています。

第21回中国人の日本語作文コンクール（教育交流 研究等助成事業）

2025年度第21回中国人の日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛、公益財団法人日本中国教育交流協会協力）には、中国のほぼ全土にわたる省市区の大学、大学院、専門学校、高校、中学校等201校から2,391本もの多くの作品が寄せられました。2004年度にスタートしてから今年度で21回を重ねました。この間中国全土の500以上の学校から、累計63,302本の作品が寄せられました。中国で最も影響力のある日本語作文コンクールへと成長し、中国での日本語学習促進・日本文化普及に大きく貢献してきたと思います。当財団はコンクールの審査に参加するとともに、応募作品の中から2本を教育賞として表彰してきました。

第21回のテーマのコンセプトは『「推し活」と日中交流』。これに沿ったテーマおよびテーマごとの応募数は以下の通りです。

- (1) 「推し活」で生まれた新しい日中交流 (679本)
- (2) 日本語で伝えたい、「私の物語」 (1,155本)
- (3) 先生との出会いが私の人生を変えた (553本)

男女別では女性が1,648本、男性が743本でした。特筆すべき点としては、昨年に続き中学校、高校および専門学校からの応募が20校を超えことにです。1次から4次までの審査を行う中で、最終的に、日本大使賞を大連外国語大学の朱恒宇さんが受賞したほか、5名が一等賞、15名が二等賞、40名が三等賞を受賞しました。

★教育賞・日中国際教育交流協会賞（5万円相当）

張靖苒（復旦大学三年生）

高宇涵（吉林大学二年生）



（1）教育賞受賞作品

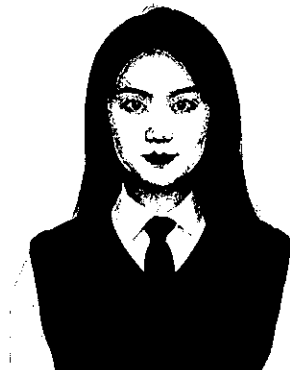
テーマ①「推し活」で生まれた新しい日中交流

百年越しの新しい推し活

張 靖苒（復旦大学三年生）

交換留学をきっかけに、私はいわゆる「推し活」に熱中するようになった。私の「推し」はあの明治時代の大作家、漱石なのだ。漱石の顔は日本語を勉強する前から知っていた。かの有名な『吾輩は猫である』を中国語訳で読んだのがきっかけで、大学で日本語を専攻することを心に決め、そしてついに『こころ』を日本語で読めるようになり、より深く漱石の世界に引き込まれていった。

交換留学中も、迷わず漱石の『草枕』を中心としたゼミを履修した。そのゼミで、漱石に魅了された各国の留学生とも知り合い、漱石をめぐる様々な交流を始めた。カナダからの留学生は、この作品がピアニストのグレン・グールドに与えた影響をみんなに紹介した。中国人の私は、「余」、「智」、「胸裏」など、小説における漢字の使われ方について自分の発見を話した。日本人の学生は小説の中にある漢詩の書き下し文について発表し、それを聞いた私は初めて日本では漢詩が高校国語の必修科目であることを知



り、驚いた。

このように、このゼミで、世界各国の漱石ファンと出会い、みんなとは教室の外でも会うようになった。初めてみんなで訪れたのは、『三四郎』に出てくる池だった。ゼミの伊藤さんが「その池はキャンパスの中にあるんですよ」と、授業の後でみんなを案内してくれた。三四郎池に立った瞬間、小説の中のあの名シーンが鮮やかに蘇った。百年以上も前に書かれた小説の世界が、目の前に現実として広がっていることに感動し、心が躍ってうれし涙が出た。

その後、特別展『「三四郎」の正体 夏目漱石と小宮豊隆』を見るために、みんなと漱石記念館を訪れた。記念館には、漱石の書斎が忠実に再現されている。机の上の文房具から壁に掛かった書画に至るまで、細部まで全集で見た写真のままで、漱石に一步近付いたような気がして大満足した。展示を見学した後、館内のブックカフェでお茶をしながら、みんなで「三四郎」の正体や漱石の書斎で開催された木曜会について熱く語り合った。

半年間の留学生活で一番の収穫は漱石推しの仲間と出会えたことだ。このまま別れてしまうのは惜しいと思い、最終授業の日、みんなに「SNSで読書会を月一でやらないか」と提案し、皆の賛同を得た。SNS読書会の初回で、私が上海の日本映画祭で見た森田芳光監督の『それから』の上映会の様子をみんなに紹介した。1985年に撮影された『それから』は、なんと上海の千人規模の劇場で二回も上映され、そのチケットは発売と同時に即完売するほどの人気ぶりだった。映画にも強い興味があったが、一体どんな人が劇場に集まって来るかと、映画館に向かう途中からわくわくしていた。隣に座っていた観客は同世代の女の子だったので、勇気をもって話しかけてみた。彼女は日本語はわからないが、漱石の作品を中国語訳で読み、軽妙洒脱な文体と深い思想性に惹かれ、映画を見にきたのだという。読書会でその話をみんなにすると、「知性や才能は、百年経っても、魅力を放つものだね。」とゼミの友達が感心していた。確かに、そういったような魅力は翻訳によって、言葉や国境を越え、人々に生きる喜びと智慧を与えてくれるものだ。

今学期の翻訳の授業では、文学作品の新訳を企画する課題が出た。これは翻訳の力を発揮し、「推し」を広める絶好の機会だと、私は迷わず漱石の『それから』を選んだ。発表を準備するために、読書会の仲間たちに、それぞれの言葉で短い推薦文を書いてもらった。中でも特に共鳴したことは「個人と社会の関わり方という、漱石が百年前に投げかけた問いは、時空を超えて現代の私たちにも深く響く」という一文だった。確かに、そういう意味で漱石は今日もなお新しい。

漱石はよく日本の国民作家と言われるが、国と時代を超え、より多くの人にその魅力を知ってもらいたい。「推し活」を通して、漱石の人格と思想に魅せられた人と、現代の生き方を考え、模索したいと思う。

（指導教師 艾菁・重澤倫子）

テーマ①「推し活」で生まれた新しい日中交流

私を変えてくれた出会い

高 宇涵（吉林大学二年生）

画面に飛び込んできた「MIYAVI」という文字。最初は名前すら読めなかったのに、今では私の「推し」だ。人と人を繋ぐ言葉の力を信じ、大学で日本語を専攻したものの、内向的な私は周囲と打ち解けられずにいた。そんな私を変えてくれたのがMIYAVIとの出会いだった。中国のある番組で偶然目にした彼は、鋭い眼光と個性的なタトゥーが印象的だった。そして、日本の伝統楽器である三味線に着想を得た独自のギター奏法は、伝統と革新を融合した強烈な個性を表現し、私は一瞬で魅了された。番組の中で彼が語った、「中国人は勤勉で、その勤勉さこそが国の力だ」という言葉も、深く心に刻まれた。

その鮮烈な出会いから、私は彼の音楽や背景にある哲学を夢中で追いかけた。そして知れば知るほど、彼は単なるギタリストではないと気づかされた。世界を舞台にした音楽活動はもちろん、ハリウッド映画での印象的な演技も話題を呼んだ。また、UNHCR親善大使とし



て難民キャンプを訪れ、ギターを手に子供たちと笑顔で心を通わせる姿は、彼の優しさと個性が生み出す力を教えてくれた。彼は少年時代にサッカーでの大きな挫折を乗り越え、「何も与えられなかったからこそ道を切り拓いた」と語る。彼のこの言葉は、諦めかけていた私に希望の光をくれた。MIYAVIに勇気をもらい、私も世界に飛び出し、新しい自分に出会えるかもしれない、と強く思うようになった。

MIYAVIを知るほどに、彼の強烈な個性は、決して表面的なものではないと確信した。彼の音楽の根源には、日本のビジュアル系という独特な文化があり、その精神性が彼の個性を支えているのだ。ビジュアル系とは、90年代から日本のロックシーンを席巻した、派手なメイクや衣装で独自の美学を表現する音楽ジャンルだ。その魅力は視覚的な奇抜さだけでなく、社会の既成概念に挑む精神性にある。特に私の心を捉え認識を揺るがしたのは、そのジェンダーに捉われない美意識だ。『源氏物語』の光源氏が性別を超えた魅力で人々を惹きつけたように、彼らは既存のジェンダーに縛られない美を表現している。それは、ありのままの自分を受け入れ、「自分らしさ」を前面に出していく勇気をくれた。SNSで繋がった中国のファンも、この自由で革新的な美意識に強く共鳴していた。こうした背景を知るうちに、私は彼の魅力を伝えたくて日本語の授業で紹介した。人前で発言することが苦手な私が、自然と想いが溢れ出し、夢中で語っていた。クラスメートたちはもちろん、日本人の先生からも深い共感と励ましの言葉をいただき、初めて自分の言葉で伝えたいことを表現できたという喜びに包まれた。彼の音楽と行動は、私に表現する活力を与えてくれた。

MIYAVIとの出会いを経て、内向的な私は少しずつ変わり始めていた。日本語を学び始めて一年が過ぎた頃、勇気を出して留学生が集まる日本語コーナーに参加した。そこで、思い切ってビジュアル系の話題を切り出してみた。「中国でもビジュアル系に共感する人がいるなんて!」と、一人の日本人留学生が目を見開き、X JAPANというビジュアル系を代表するバンドの曲を教えてくれた。その自由を謳う歌も、国境を越えて私の心に響いた。この経験は、私の「個性」を解き放ち、外へ踏み出す勇気を与えてくれた。そして、このような魂の共鳴こそが、日中の若者の心の壁を溶かし、真の文化交流を育むと信じている。

私の「推し」であるMIYAVIとの出会いは、私の世界を大きく広げてくれた。彼の音楽が国境を越えて響くように、私も異文化理解を深め、多様な価値観に触れながら、誰にも真似できない自分だけの「個性」を磨きたい。そのための第一歩として、今年、日本への交換留学を決意した。日本で得る経験を活かし、MIYAVIが示すように、豊かな「多様性」の中で一人ひとりの個性が輝く社会の実現に貢献したい。

(指導教師・永岡友和)

機関関係

(1) 2024 (令和6) 年度事業・会議報告 (2024年4月1日～2025年3月31日)

2024 (令和6) 年	
5月9日(木)	2023 (令5) 年度会計監査
15日(木)	第54回理事会
6月3日(月)	第30回評議員会
21日(金)	第55回理事会 (書面議決)
27日(木)	中国宋慶齡基金会との打ち合わせ (役員訪中団・2024年度教育交流協定書)
	山梨県教組との打ち合わせ (第9回教育交流ホームステイ)
7月9日(火)	フジ国際語学院と打ち合わせ (第9回教育交流ホームステイ)
22日(月)	JTBとの打ち合わせ (役員訪中団・第9回教育交流ホームステイ)
26日(金)	第9回教育交流ホームステイホストファミリー説明会
30日(火)	第9回教育交流ホームステイ留学生説明会
8月6日(火)	第9回教育交流ホームステイ留学生説明会
10日(土)～12日(日)	第9回教育交流ホームステイin山梨
14日(木)	JTBとの打ち合わせ (役員訪中団)
16日(金)	中国宋慶齡基金会と打ち合わせ
27日(火)	第20回日本語作文コンクール最終審査結果送付
9月9日(月)～12日(木)	役員訪中団 (北京・阜平県)
10月6日(日)	2024年度教育交流協定書締結
11月18日(月)	内閣府との打ち合わせ
	教育支援費用100万円送金
12月14日(土)	第7回日中ユースフォーラム参加

2025 (令和7) 年	
2月19日(木)	第56回理事会 (書面議決)
21日(金)	第7回日中教育文化交流シンポジウム
3月3日(月)	2025年度予算案会計事務所と打ち合わせ
	第1回田中一郎記念奨学基金日本語作文コンクール入選・優秀賞者決定
8日(土)	フジ国際語学院卒業式
	第1回田中一郎記念奨学基金日本語作文コンクール表彰式
21日(金)	第57回理事会
	第31回評議員会
25日(火)	会報第31号発刊
	内閣府へ事業計画書等の提出

(2) 2024 (令和6) 年度事業報告

中国宋慶齡基金会との「教育交流プロジェクト」の推進確認のもとに、2021年度からの5か年計画の4年次として、河北省保定市阜平県における取り組みの推進を行いました。教育交流派遣事業・支援事業・受入事業の展開へと結ぶことのできる草の根教育交流をより深く、多様に発展させることを目指して計画を進めました。2024年度は、早期に「役員訪中団」の派遣を行い、「視察研修訪中団」の派遣、「第6次宋慶齡基金会教育交流代表団」の受入、「第5回音楽教育交流会」の開催等の取り組みを進めようと計画しました。しかしながら、年度